

私の土佐日記より—お盆の急報2件



随筆

三谷裕康*

1. はじめに

延喜5年(905) 38~39歳頃に古今和歌集を撰集した紀貫之は、延長8年(930) 63歳から承平4年(934) 67歳まで足かけ5年、国司として土佐に滞在したのである。有名な土佐日記は、貫之が任務を終り、12月27日に国府を出発し、翌年の2月16日都に着くまでの船旅55日の紀行文である。

私は昭和55年(1980)6月に63歳で国立高知工業高等専門学校の校長として文部省から土佐に派遣され、同61年3月停年で退任するまで、足掛け7年土佐に在住した。その間に綴られた私の土佐日記の中で、忘れえぬお盆の急報2題について述べ、大学では味えぬ、爽やかで奇妙な物語を披露したいと思う。

貫之の土佐日記は土佐を離れるの記であるが、私のはまさに在任中の土佐日記なのである。

2. 飲酒運転

8月15日は忌まわしい終戦(敗戦)記念日であると同時に盆でもある。3人の弟妹は夭折し、両親も亡く、総領の私1人が残る結果となったので、先祖の菩提を弔うのは私の勤めである。盆には、私を筆頭に、倅と孫3代の家族が揃って仏事を行うのが習慣となっている。高知へ赴任してから、空き家同然の我が家にも、俗に言う盆と正月には賑やかな数日がやってくる。

新任1年も過ぎた昭和56年8月15日、仏壇の前で菩提寺の住職が読経している最中に、高知から学生主事の急報電話が掛かった。合宿練習を上げた剣道部員のうち、副主将を含む数名

が下宿で酒宴を開き、散会后バイクで帰宅途中の副主将が交通違反を犯し、飲酒の事実が発覚したのである。彼は未青年であったから、違反のみならず、違法ということになる。当然無期停学は免れない。酒宴に同席した部員も勿論処分の対象となる。とりあえず前例に従って処分することを承認した。間髪を入れず、以後部員全員が道場に入ることを禁止した。その代りに戸外で稽古することをむしろ督励した。

高知高専では、毎年正月中旬から延2週間、全寮制の1年生及び2年生、男女を問わず、全員が各1週間早朝の寒稽古を行うのを慣例としている。その監督と指導に当たるのが、師範と部員であるから、柔剣道、弓道、空手、合気道と少林寺拳法が出揃う中で、剣道部員だけが道場に入れられないようでは、折角の教育的処方が仇となる。

昭和57年正月11日、恒例の寒稽古に先立つ1週間前の早朝、南国とはいえ、太平洋に面して放射冷却の強い沿岸では、最低気温が大阪より約2度低い。剣道部員全体を道場に集めて、「負け犬になるな」と大音声で訓示し、「1週間の汗で100日の禁を流す」と宣言した。彼らは悪びれることなく、全員の眼に凜々しい輝きを感じるのであった。

同年7月下旬、四国高専総合体育大会が地元高知で開催された。毎年低迷を続けていた我が校の剣道部が見事に優勝し、更に総合優勝に花を添える結果となった。つぎに8月の全国大会で、剣道部は準優勝の栄冠に輝いた。それ以来剣道は四国で4連覇を達成し、これを契機として、総合成績でも高知高専が四国で3連覇の新記録を樹立した。

処分から解放された副主将は、選手の列に復帰し、剣道の四国制覇及び全国準優勝の原動力となった。彼は卒業後に長岡技術科学大学物質

*三谷裕康 (Hiroyasu MITANI), 大阪大学・高知高専各名誉教授, (財)大阪高等技術研修所理事・副所長, 工学博士, 粉末冶金学・熱処理



写真 筆者 高知工業高等専門学校において
(昭和61年3月)

工学科に進学した。現在大学院生として精進していることと思う。

高知高専では、学生主事が主宰する補導委員会で学生の処分が決定され、満期になれば、自然に消滅し、台帳に残らない。校長は報告を受け、許可するだけである。今回の集団制裁は私の独断で、前例のないことであるが、好転したのは高知高専の学生が善良で素朴であったからであろう。

3. 痴漢侵入

昭和57年8月15日、珍しくお盆を高知で過した。深夜寮務主事から急報があった。女子寮に空き巣が侵入したと言うのである。直ちに警察へ届けたが、学生は休暇中で、立ち入り検査もできない。とっさに私は「事件を内聞にし、女子寮の改築に踏み切ろう」と持ちかけた。寮務主事は叱声を覚悟していたであろうけれども、それを不問にしての切り返しであるから、「それはよろしうございます」と改築を納得してくれた。

8月末には寮生が帰寮するので、早速女子寮

長立会のもとで調査を行ったところ、休暇中に残っていた下着類がごっそりと盗まれていた。空き巣は単なる痴漢であった。四国の高専中で高知は女子学生数が断然トップであり、四国で女子寮を有する唯一の高専であるから、女子学生は勿論のこと、保護者に不安を与えないように、具体的な処置を講ぜねばならなくなってきた。

高知高専は空港に接し、特に寮が空港に突出した形になっているので、昭和59年末ジェット化予定の空港対策として、前校長から学寮移転の実行を申し送られていた。定員520名の寮であるから、移転には膨大な費用を要する。赴任以来毎年私は学寮移転の概算要求を提出してきたが、ゼロシールの時代に、騒音公害の対策とはいえ、僻地の高専に巨費を投ずる文部省ではない。しかも高専キャンパス内に密集する41戸の平家建教職員宿舎を、道路を隔てて接する高知大学農学部に移し、高専と高知大学の合同宿舎を新設、その跡地に寮を建て、寮の跡地を高専の野球場にするというのが高専案であった。

まことに虫のよい話で、高専が農学部へ侵入した形になる。農業部は広大な土地を擁しているのに、それでもなお了解はついていたようであるが、省庁別、即ち高専と高知大とは文部省直轄であるから、合同すれば、文部省別ということになり、大蔵省のタブーに該当する。逆に文教関係以外の職員が入居できる合同宿舎をキャンパス内に新設するのは、自治の建前から、農学部教授会が認めない。既に寮の移転は暗礁に乗りあげていたのである。

最後に寮の土地を交換することも考え、県や文部省及び運輸省の理解を求めに行ったこともあるが、相手にされず、一方空港のジェット化工事はどんどん進むので、八方塞がりとなり、私は秘かに寮自体の防音対策を講ずる決意を固めていた。そのような時に偶然起ったのが痴漢侵入事件である。それ以来、女子寮の増改築に教職員のコンセンサスを得ることができるようになった。かくして寮の移転は自然消滅となる。

昭和60年2月から、2階建14人定員の旧寮に4階建36人分の増築工事及び女子寮全体の防音改修工事が着工の運びとなった。8月末には竣

工し、定員50人の理想的な女子寮が実現した。これより先の昭和59年末から、高知空港にジェット機が運行するようになったが、地上音がプロペラ機より低く、案ずるより安しで一件落着となった。痴漢侵入から丁度3年目の解決である。

高知高専の女子寮は全国から注目されるようになり、他校の寮務主事や学生課長が相次いで見学に来られた。ついでに男子寮の増改築及び防音工事も続行され、私の退任直前の昭和61年3月26日に竣工した。かくして私は足掛け7年の任務を終ったわけである。

4. おわりに

高知高専の初代野手悌士校長と2代中村康治校長は、相次いで横浜国大から派遣され、言わば関東所管となっていた。初代校長は元満鉄鉄研次長であり、気骨のある校風を確立した。2代校長は紛争時代の横浜国大大学長であったが、56歳で退官、野手先生の推挙により第2代校長を継承し、よく伝統を守り抜いた。

私は、阪大在職最後の年に、当時の中村彰一工学部長（現在高知高専第4代校長）から、校名は不明であるが、高専校長推薦の依頼があったので、応募してくれないかと、密かに打診さ

れたので、確実な話ではないという前提で、漠然と承諾した。高知ということがわかったのは内定1カ月前であったと思う。それ以後「革命と自由の生れし地」高知への好奇心が高まってきた。

赴任して先ず驚いたことには、高知高専の全学生が制服を着用しているのである。4年生と5年生は大学生に相当するので、他高専では服装が自由となっている。革命と自由どころか、私自身が勤まらさうかと案じるほどであった。しかし、規律は取締りが大切であるから、先生方に任せ、規律の最たるものを礼と考え、私は学生個人の礼に対し声を出して礼を返すように心掛けた。その所為か、校外でも学生は私に接近し、親しく挨拶するようになってきた。

学校の運営については1年間沈黙、3主事（教務、学生、寮務）を見習うことにした。しかるに2年目と3年目の8月15日、魔の急報「飲酒運転」と「痴漢侵入」で、私の沈黙が破れ、吠えざるをえなくなった。結局禍転じて福となり、「気力復活」と「学寮刷新」の2大収穫が得られたのは、道理が通じたからであろう。それにしても土佐は矢張り私の竜宮であり、今、私は浦島の心境である。（完）